法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-09

シンポジウム「加来彰俊先生のご業績と思い出」 ： 思い出すことなど ： 田中美知太郎先生、加来彰俊先生、法政大学

田中, 博明 / TANAKA, Hiroaki

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY / 法政哲学
(巻 / Volume)
15
(開始ページ / Start Page)
45
(終了ページ / End Page)
51
(発行年 / Year)
2019-03-30

思い出すことなど

――田中美知太郎先生、加来彰俊先生、法政大学――

田　中　博　明

本日は思いがけなくも法政哲学会において「加来彰俊先生のご業績と思い出」に関するシンポジウムに参加させていただくこととなり、たいへん光栄であります。

それで、わたしは三番目の提題者ということで、思い至ったことがあります。ギリシア悲劇というものがあり、古代ギリシアでは悲劇のコンクールが行なわれていました。悲劇作家は四作でひとつのユニットをなす作品群を上演してコンクールを戦うわけですが、そのユニットの三番目は他の三作品とは性格が違っております。それはサテュロス劇というもので、悲劇とは反対に滑稽な内容をもったものです。

わたしはこのシンポジウムで三番手をつとめるということで、サテュロス劇を自分にかさねております。どうかお気軽に聞いていただければ幸いです。

わたしにとって、田中美知太郎先生と加来彰俊先生の思い出は、わたしの京都大学在学中の思い出として深くかかわります。

わたしが社会人生活を中断して京都大学に入学した一九六〇年代初頭は、京都大学の落日の輝きではなかったでしょうか。西洋中世哲学の高田三郎、近世哲学の野田又夫、東洋史学の宮崎市定、中国文学の吉川幸次郎などの諸先生を思い浮かべます。宮崎先生はわたしにたいへん親切にしてくださった先生です。ある時、中国史をやらないか

とすすめてくださいました。わたしの祖父は漢学者であったので、わたしは中国史にも興味はありましたが、「わたしは田中美知太郎という先生がどのような人か知りたくて京都に来たので、申し訳ありませんが田中先生の下で学ばせていただきます」とのべて、お誘いを断りました。

田中美知太郎先生の演習ですが、始めはヘラクレイトスの断片を読むことになりました。古代ギリシア語を正確に読むために新入りを文字どおり「しごく」、初心者にとってはたいへんな授業でした。また、原典理解のために欧米の注釈書を参考にしますが、美知太郎先生は「外国の注釈書にも原文を読めていないものや誤りも散見する。外国のものをあまり信じてはいけない」と注意され、演習では原文を正確に読む訓練をすることに集中されていました。そのうえで原文に対する「解釈」は各自「下宿でやれ」という教育方針でした。

演習とは別に、田中美知太郎先生の講義にも出席しました。その時に加来先生の存在を初めて知りました。大山定一先生の『西東詩集』の授業にも出席していた時なので、一九六一年ということになります。加来先生もわたしの存在はご存知であったと推測します。加来先生もわたしも、美知太郎先生の講義が行われる、二階建て木造校舎の教室の、いつも決まって隅に座っていたので。

加来先生の演習としては一九六三年の『ソピステース』講読が最初でした。出席者はわたしを含めて三名。この演習ではテクストを読めるだけ読みすすむ、という方式（京大方式と呼ばれていました）ではなく、出席者ひとりひとりが訳をつけ、先生も訳されたと記憶します。この方式はわたしにとって美知太郎先生の厳しいやり方よりもギリシア語読解の勉強に役立ちました。このほか、ブルーノ・スネルの『精神の発見』、ドッズの『ギリシァ人と非理性』の原著も読んでいただきました。また、授業とは別に個人的に『ゴルギアス』を一緒に読んでいただいたことを思い出します。先生はすでに『ゴルギアス』（一九六〇年）の翻訳・注釈書を完成させ岩波書店から出版されており、謙虚な先生にしては自負をもたれておられたように思います。この文章の最後に掲載した写真は一九六四年の秋十一月ころ、演習の後に出席者三名と撮影したものです。

加来先生は一九六五年に弘前大学人文学部に助教授として赴任されます。お見送りをした上野発の夜行列車のホームを思い出します。その少し前、先生は京都の雪を蹴飛ばしながら「ちょっと遠いな」と仰っていましたが、実際に弘前に行かれてからは充実した研究生活を送られていたのだと後に感じました。弘前のことを語る先生のお顔は、失礼ながら、よいお顔に見えました。一度だけ弘前に先生を

お訪ねしたことがありますが、この時代の先生の具体的なご様子は、三上先生のお話から垣間見えるように思います。

法政に移られてからは個人的にも、また後には法政哲学会でもお会いする機会ができました。わたしも法政哲学会会員になりましたので。法政大学での加来先生について詳しいことは知りません。ただ、先生が法政の先生方や学生さんたちにとても大切にされていることは感じていました。

先生が東京に移られてから十年ばかり経ったころ、すでに理事職に就かれておられた先生の代講としてわたしは「ギリシア語初級」を担当させていただくことになりました。この授業はもともと先生が担当されており、その後に先生と親交のあった学外の先生方も担当されていたようです。弘前大学から筑波大学に移られた野町啓先生、津田塾大学から筑波大学に移られた池田美恵先生、そして東京学芸大学におられた田之頭安彦先生です。その後、また先生が担当されていたところに、わたしが代講を勤めさせていただくことになったわけです。授業の初日、一九八六年（昭和六一年）の四月十七日でしたが、学内施設の勝手も分からないだろうから、ということで先生がみずから八八年館の八七〇番教室まで案内してくれました。まだ外濠公園の桜の花が印象的な日でした。

二年間「ギリシア語初級」を担当した後、いまは廃止された第二部（夜間部）の「教職科目 哲学」の講義を担当することになりました。この授業はその後、十五年間続けさせていただくことになりました。プラトン、アリストテレス、アウグスティヌス、トマス・アクィナスなどを講じました。たいへん多くの学生が履修し、履修生以外の聴講も多かったです。夜間の授業なので、日中は働いている社会人が主な学生で、授業の後、夜中に新聞社で働く人々もいました。上智大学のシスターたちもいました。また、元やくざだったという人もいて「先生、学問っていいもんだな」と感想をのべてくれたこともありました。

こうして法政大学で十七年間、教壇に立たせていただきました。辞める年度末の二月二二日に、先生はわたしのために送別会を開いてくださいました。

牧野英二先生は「漢字文化圏におけるカントの受容過程」を次の四つの段階に分けられています。すなわち、

一　素朴な受容期　二　能動的受容期　三　研究消化の時期　四　反省的な生産の時期　です（『東アジアのカント哲学』）。妥当な分類だと思われます。これを元にしていえば、加来先生のお仕事は　一　素朴な受容期　を通過して、二　能動的受容期　にすすんだ時期に該当するでしょ

うか。しかもそれは強力な推進力であり、たいへんなご苦労を伴ったことは想像に難くありません。

加来先生は田中門下では兄貴分であられました。それは藤澤令夫先生のみほ子令夫人がよくご存じでした。加来先生がお亡くなりになったときに頂いた私簡の一部にはこうあります。「加来さんは暴走する藤澤をよく制御してくださり、忠告してくださり、一番親切な先輩でしたからね。…残念なお別れとなってしまいました。淋しく悲しいことです」。

加来先生は郷里鳥取の「伯耆大山」（ほうきだいせん）のようなひとでした。思いやりのひと、他者の側に立てるひと、ひとの痛みを受けとめることのできる方でした。

先生、さようなら。

1964年11月頃
京都大学近く
右端　加来先生
中央　田中氏

シンポジウム当日に田中博明氏が配布された資料を二点添付します。いずれも加来先生と田中氏との関係を、あるいは田中美知太郎先生と法政大学との関係を物語る資料です。（編集部）

【資料1】

T君のこと

加来彰俊

T君とは私が京都大学で非常勤の講師をしていた頃、プラトンの原典講読に参加していた学生たちの一人であり、以後、五〇余年友情を保ち続けている人のことである。彼は大学院の修士課程を終えると、さらりと定職もなく東京に戻り、ある文化団体の嘱託や社外校正者、やがて学術書の刊行で名のある出版社に正式に勤めてからは、『日本思想体系』、『プラトン　Ⅰ―Ⅳ』（田中美知太郎著）、『パスカル「パンセ」注解　Ⅰ―Ⅲ』（前田陽一著）、『詩の心を読む』（茨木のり子著）、『プラトン全集　別巻索引』（応援）などの校正者として、また、『ギリシア悲劇全集』の

編集者、そして『ソクラテス以前哲学者断片集』の実務（Ⅰ―Ⅲ）や『キケロー選集』の企画立案者として、わが国の西洋古典学研究の進展におおいに寄与してくれていた。

その頃、私も東京に移って法政大学に勤めていたので、彼にも一度教師の仕事もしてほしいと思って、まず二年間は、私の担当していた「ギリシア語」の授業を肩代わりしてもらった。その後、金曜日の夜間なら会社勤めの身でも都合がつくだろうから、二部（夜間）の第三限（午後八時二〇分―九時四〇分）に組まれた「教職」の「哲学」の授業を委嘱することにした（これはその後、一五年間つづいた）。この授業は、二部の法学部、経済学部そして文学部（教育学部）の二年生以上の学生を対象としたものであり、とくに教員免許状取得のための必修科目の一つでもあったが、金曜日夜の最後の授業にもかかわらず、毎回二〇〇人ぐらいの学生が出席したようである。しかし、彼らの大半は昼間は各種の職業に従事していて疲れ切っている勤労学生であったし、また平常は合宿生活で授業に出る余裕のない体育会系の学生もいたりしたから（少なからぬ単位云々とは関係ない盗聴者もいたという）、それに、哲学とは何かわけの分からない難しい学問だという先入観もあったりしたので、この時間での「哲学」の授業は容易なことではなかったろうと察せられる。しかし、哲学必修の学制改革後は六〇人ぐらいであったらしい。

だが、T君は苦労人でもあったから、それらの事情を十二分に察知したうえで、全くの型破り授業を行なったらしい。私は直接に見聞したわけではないが、受講者の「感想文・批判文」にもとづいて、彼の授業風景の一端を想像して記してみることにする。――

開講初日、T講師は、いつもそうするのだが、軽く一礼して教室に入る。そして壇上に上がり教卓に立ったまま、学生たちに向かって、「学友諸君！」と呼びかけて、「これからみなさんと一緒に哲学を学ぶことにしましょう」と語り始める。学生たちはこれまで大学の教授たちから「学友」などと呼びかけられたことはなかったから、一瞬戸惑い、違和感さえ覚えるが、T講師のこの一言で、それまで私語でガヤガヤしていた教室がにわかに静まる。

T講師はつづいて、「哲学は驚くことから始まる」というプラトンやアリストテレスの言葉を引きながら、その「驚く」というギリシア語を黒板に書き、これは「タウマゼイン」と発音するのだと教える。その後は、この「驚くこと」が「知への愛（知りたい）」を原義とする「哲学」とどう結びつくかを説明したのであろう。そのとき、「人は生まれつき知ることを欲する」というアリストテレス

『形而上学』冒頭の言葉も引いたのかもしれない。推測はしにくいが、四五分ほどはすぐに経つ。すると、T講師はここで一服しようと言って、五分間の「タバコ・タイム」をとる。これも異例のことだったが、学生たちも一息つくし、T講師自身も廊下に出てタバコを吸い、近くにいる学生たちに話しかけて一人ひとりとの交流をはかろうとする。まず、やったのは一人ひとりの名前をおぼえることであったようだ。

後半の残り四〇分余の授業内容は何だったろうか。あるいは、前半の話を承けて、古代ギリシアで哲学という学問がどこでどのようにして起り、どんな発展をとげたかの概略を述べたものだったかもしれない。しかしそれは、エピソードや逸話をまじえての自由自在の話だったであろう。これで初日の授業は終わるが、学生たちは何か心の安らぐ思いで、来週の金曜日を楽しみにしながら帰途についたようである。

こうして第二回も第三回も…そして年間二〇回ほどの最後の授業でも、毎回同じように、古代だけでなく中世や近世の哲学者の書物の中から二、三の有名な語句や文章を引き出しては、それを話題の中心にしながら、自分の思いも込めて、やさしく丁寧な口調で語り聞かせるという、いわば「断章」風な形式の授業がなされたらしい。

しかしT講師の型破りな授業の最たるものは、年度末の最後の授業後半後の「シンポジウム（飲み会＝お別れ会）」だった。山登りの好きなT講師は、愛用のリュックサックに缶コーヒーや缶ジュース、時には缶ビール（これは自分で）も一杯に詰め込んでこれを背負い、手には女子学生用のお菓子をたずさえて教室に入る。そして授業が終わると、みなが立ち上がって紙コップを手にしながら、しばらく談笑したあと、最後に、T講師の「ワァーレ」（「お元気で」「さようなら」）という発声にみなが唱和して散会したとのことである。

――このような授業の仕方にはむろん、いろいろと批判もあるだろうが、これがT君の生活流儀の一つでもあったのである。

（二〇一一年一一月二四日）

【資料2】

田中先生から人生の道を学ぶ

石川誠一　高校教諭　五四歳

（一九八六年一月二三日付『朝日新聞』「声」欄掲載）

田中美知太郎先生には三〇数年前一度お目にかかった。

昭和二四年の晩秋であった。大学を受験すべく、それまで箱根以西を知らなかった私は京都を見てこようと思い、夜行列車に乗っていた。「浜松」と呼ぶ車掌の声に目覚めた。隣の四〇がらみの、顔にやけどをした紳士が「どこに行くのかね」とたずねた。「京都へ」と私はねぼけまなこで答えた。

なにをしに？　大学を受けたいので様子を見に行くんです。両親は？　父はぼくが生まれてまもなく死に、母だけです。　生活は？　貧乏です。姉三人織物工場で働いています…。

紳士はおもむろに私に言った。「家族にそんなに苦労をかけてまで京都にいくことはない。聞けば哲学を志しているようだが、それなら東京―そうだ法政の夜学に行きなさい。あそこには谷川徹三さんがいる。三木清、戸坂潤のながれもある」。

なにか相談することがあればいつでも連絡するように、と前置きして「私は京大に勤めている田中美知太郎といいます」と言った。私はよく分からないまま半ば無念の思いをいだいて帰ったが、結局先生の教えを守った。

謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

〔この投書は田中美知太郎先生が亡くなられた一九八五年（昭和六〇年）十二月の翌月に「声」欄に掲載された。田中美知太郎先生は一九二八年（昭和三年）から一九四七年（同二二年）まで法政大学文学部の兼任講師であったが、昭和二一年に桝田啓三郎先生が法政大学の文学部教授に就任を依頼しに田中美知太郎先生の許を訪ねたときには「京都大学からの招聘に対して「受ける」返事をしてしまった」とのことであった（一九八一〔昭和五六〕年一月二四日、法政哲学会創立総会における桝田の講演より）。投書の著者が田中美知太郎先生に車中で声をかけられたのは先生が京大に着任されてから二年後ということになる。加来先生は田中博明氏にこの投書の著者を探して会ってみたいね、と生前に何度か話題にされたという。（編集部）〕